

—光と赤外線で見える生成と進化—

佐藤修二 国立天文台助教授

当日の出席報道機関は6社であった。

また会期中に、内地留学奨学金選考委員会、評議員会、理事会が行われたが2日目午後4時30分から「天文学長期計画」の特別セッションがシンポジオン（C会場）で開かれ活発な議論が交わされた。その他に11の研究集会があった。

賛助会員のための展示コーナーには、(株)ニュートリノ1社が参加した。

懇親会は、第2日目(10月14日(水))午後6時～8時に豊田講堂ロビーで開催された。参加者は220名を超える盛況であった。

会期中、このロビーは、受付事務、展示コーナー、コーヒープレークに使用していた所なので、懇親会前後にはその準備、後かたづけなどアルバイト学生の活躍に負うところが多かった。

今回の年會に当り、(財)大幸財団様から、また

懇親会には、五島プラネタリウム様、(株)エイ・イー・エス様からご寄付をいただきたいへん感謝しております。

◎公開講演会

年會初日の10月13日午後6時から、名古屋市科学館・サイエンスホールで開催された。講演会は、名古屋市科学館の北原政子氏の司会で科学館館長の挨拶、天文学会理事長の講師紹介を兼ねた挨拶から始まったが、定刻には会場(320名)はすでに80%が埋まっていると云う状態であった。

講演は、星の生成の様子を条理を追って説明された福井氏、独特な話術で説明された佐藤氏のそれぞれのお話は、なかなか含蓄のある内容で、活発な質疑が幾つも交わされた。

なお、この講演会は、日本天文学会・名古屋市科学館の共催で行なわれたもので、開催に当たっては会館側から資金を含めたお世話をいただき感謝しております。

天体発見報

種類：周期彗星の回帰検出

天体名：1992 t スイフト・タットル周期彗星
(P/Swift-Tuttle)

発見者：木内鶴彦(長野県白田町)

発見日時：1992年9月26日18時10分(世界時)

発見位置：赤経 $11^{\text{h}}47.5^{\text{m}}$ 、赤緯 $+59^{\circ}00'$ (J2000.0)

発見時等級：11.5等

発見方法：15cm 25倍双眼鏡

軌道要素：(B.G.マースデンによる)

Epoch=1992 Dec. 4.0 TT

$T=1992 \text{ Dec. } 12.391 \text{ TT}$ $\omega=152.979$
 $e=0.96362$ $\Omega=139.430$ } J2000.0
 $q=0.95876 \text{ AU}$ $i=113.408$

$a=26.35441 \text{ AU}$

$n^{\circ}=0.007285$ $P=135.29 \text{ 年}$

発見天体について：

スイフト・タットル彗星はペルセウス座流星群

の母彗星で、1862年7月にアメリカのスイフトとタットルによって発見された。同年の観測データに基づいた120年周期を採ると1982年に回帰するはずであったが、1973年にマースデンにより1737 II彗星と同一である可能性が指摘され、1992年に回帰する可能性もあった。今回の検出がそれに当たるのではないかという国立天文台の指摘に、天文電報中央局も同意しており、1737 II=1862 III=1992 t=スイフト・タットル周期彗星の確立に大きく近づいたと思われる。

1992年9月29日 香西洋樹(国立天文台)